

---

# 糸紡ぎの仲介者

白石のっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

糸紡ぎの仲介者

### 【Nコード】

N9738C

### 【作者名】

白石のっち

### 【あらすじ】

運命の人と人の間を繋いでいる一つの糸その糸を唯一見ることが出来、糸の存在を人に伝える事が使命の仲介者の物語

## 1：糸紡ぎの仲介者

空の上を、無数の糸が海の果てに向かって伸びていく。

昼の港。遠くの船着き場では朝の漁から帰ってきた漁師達の勇ましい声が聞こえ、糸はその漁師達の元からも漁師達の元へも伸びていく。

一本一本、彼女は毎日の日課となっている糸の確認を丁寧に行う。強い海風が吹いた、彼女の肩越しまで伸びた黒い髪が大きくなびく。しばらく彼女は髪を抑えた後、髪の手直しもそこそこにすぐさま糸を確認する作業へと戻った。

ちょうど全ての糸の確認が終わりかけた時、誰かが彼女の服の袖を引っ張った。大事な作業を邪魔され、彼女は少し不機嫌そうに後ろを振り返る。

一人の青年と子供がそこに立っていた。青年は作ったような笑顔を見せ、袖を引っ張った子供は少し緊張した面持ちでこちらをじっと見ている。

彼女は子供の用事がなんなのかわかると、子供の緊張と心配をほぐすように笑顔を見せた。

「大丈夫、あなたのお父さんの糸は無事よ」

彼女の言葉を聞き、子供は笑顔を見せる。

「ほら言っただろ、ステープルはああ見えてやさしい奴なんだ。今度から一人で聞きにいけよ」

青年は喜ぶ子供の頭を軽く叩き、子供も青年にお辞儀を返す。

「あ、ありがとう」

子供はまだ少し緊張したような様子でステープルにもぎこちないお辞儀をすると、そのまま走って去っていった。

「それでクイン、あなたは何か用？」

ステープルはその様子を見送ると、続けて青年へと視線を移す。ステープルの怖いぐらい真っ直ぐに自分を見つめる視線に、一瞬ク

インは自分が何の用で来たのかわからなくなっていました。

「もつと優しい言葉をくれよ、でないと用件も言わないぞ」

だから子供も怖がるんだ。クインはすぐその倉庫の物陰で見つけた、自分の父の事を聞きたくてもなかなかステープルに話しかける事が出来なかった子供の事を思い出す。だけどそのおかげでステープルに話しかける口実ができた、クインは密かに子供に感謝してよく考えたら自分が特にステープルに用事があるわけでもない事を思い出した。

「やさしくしてるわよ、これでも」

再び海風が吹いた。ステープルは髪を払いながら少し海を振り返り、再びクインの方へ向き直る。

クインは向き直ったステープルの視線が自分から逸れている事に気づいた。ステープルの視線を辿って後ろを振り返ると、そこには一人の中年の女性が悲しげに立っていた。

女性はゆつくりとステープルの元へ近づいていく。

「仲介者様」

女性は少しうつむいたまま、仲介者　ステープルの事を呼んだだけで押し黙ってしまった。

「わかってるわ、糸が無くなっていたのね」

ステープルは女性の肩にそっと触れた。

「はい、もしかやと思つて仲介者様に確認をお願いしに来たんですが」ステープルは残念そうに首を振る。それが何を意味するかわかっていた女性は静かに顔を手で覆った。波の音にかき消されるほどの小さな嗚咽がステープルとクインの耳に入る。

だが女性が悲しみに暮れている時間はほんのわずかだった。女性はすぐに顔を上げると、何が起きたのかわからないでいるクインの方へ微笑みかける。

「遠くから見てたわ、息子を案内してくれてありがとう」

お礼の言葉を聞いて、クインはこの女性が先程の子供の母親だった事を理解した。また、二人の会話から海に向こうへ旅立った女性

の夫が亡くなった事も。

「いや、俺は当たり前前の事をしたまでですよ。それよりも主人を亡くされたあなたが」

全てを理解したクインは自分に微笑みかける未亡人の女性に向かって慌てて首を振った。

「あなたの夫、糸が繋がった相手は幸せでした。ヤーンの選んだあなたに支えられたんですもの」

「そうね、私も後悔はしてないわ」

力強い顔で女性は答えステープルにお辞儀をすると、二人の元から去っていった。

「まだ始めたばかりなのに気が滅入りそう」

女性の姿が見えなくなるのを確認して、ステープルはその場に座り込んだ。

「やさしいステープルなら大丈夫だって、やっていけるよ」

間が悪そうに、クインはステープルに励ましの言葉を掛ける。

「そうじゃないの。それもあるけど、糸に嘘をついたのがつらいのよ」

先程の子供についた父は生きているという嘘。とっさの事とはいえ糸を仲介する者としてステープルは糸に関する嘘をついてしまった事が許せなかった。

「それでクイン、あなたは何か用」

立ち上がり服についた砂埃を払いうと、ステープルはさっきよりも語気を強めてクインに訪ねた。

「ああ、そういえば揚がった魚を運ばなきゃいけないんだった。用事は後で言うよ」

少し視線を上にとらした後、思い出しようにクインは呟く。

そのまま逃げるように港から去ろうとするクインをステープルは呼び止めた。

「あなたも糸に嘘をついてばかりいるとヤーンが怒って獣にさらわれちゃうわよ、しっかり自分の糸の相手を見つけてなさい。それが私

のためにもなるの」

ステープルの警告にクインは人差し指を伸ばし、自分の糸はそっちへ伸びてるよと返した。

それを受けステープルは自分の指をじっと見つめるが、すぐなため息をつけてその返しを否定する。

「何も見えないわ」

再び強い風が吹いた、そろそろ帰ろう。最後にもう一度海の果てへ伸びる糸を確認し、ステープルは港を後にした。

海の果てだけでなく、港、道、家の屋根の上、屋根より高い空、あらゆる所に運命の糸は張り巡らされている。

港から続く大きな通りの中、ステープルは道を歩く人々から伸びるそれぞれの糸を確認しながら歩いていった。

糸が繋がった老夫婦。それぞれの糸が反対方向へ伸びている男女、会話から察するに二人は兄妹のようだった、お互い糸が繋がってないと恋愛は成立しない。糸に対する思いをめぐらせていると、道の先で手を繋いで歩いている見知った男女を見つけた。二人の間に糸は見えない。

「エルナン」

ステープルが呼びかけると、エルナンと呼ばれた女性とその横にいた男性は一緒に振り向いた。

「あらステープルさん、港からの帰りですか？」

話しかけてきた知り合いに、赤毛の短い髪を揺らしながらエルナンは笑顔を見せる。

「エルナンはフートと買物何か？」

エルナンはステープルより年は少し下だが、家が近い事もあり、幼い頃から妹のように仲良く接してきた。横にいるフートとは恋人同士である。

「10日後の儀式、頑張ってください」

そう言うとフートはエルナンとお互いを見合った。二人には糸が

無いのではなく、今は糸が見えないのだ。

糸は年に一回仲介者が糸の儀式を行う事によって、始めてその目で見えるようになる。儀式を受ける年齢はその地域によって違うが、ステープルの家系の担当地域の場合は大体自立して相手を養えるようになる年齢、生を受けて20年を目安としていた。

「でも私、糸が本当にフートに繋がってるのか少し不安だわ」

「大丈夫だって、俺の糸はきつとエルナンに繋がっているよ」

フートはすでに5年ほど前に儀式を終えているがまだ糸は伸びていなかった。もしフートの糸がエルナンに繋がっているとした場合、エルナンも儀式を終える事で始めて二人が自分の糸を見えるようになる。

それはステープルら仲介者達も同じだった。海の果てへ伸びた糸のように他者の糸を見るには、まず本人同士が儀式を終えて糸を見えるようにしないとイケなかった。

ステープルはフートの言葉は恐らく本当だろうと思っていた。糸が繋がる者同士の場合、まだ糸が伸びていなくても何か感じるものがあると聞かされていたからだ。

「あいかわらず仲がいいわね、見ててなんだか嫉妬してくるわ」

ステープルは目の前で仲の良さを見せる二人を見て自分が場違いに思えてきた。その空気を察したのかエルナンがあわてて話題を変えようとす。

「そついえばさつきクインさんを見ましたよ」

クインも数年前に儀式を受けたが、その指先から糸が伸びる事はなかった。

だがそれ以来、クインは自分の糸はステープルに繋がっていると知っている。港に何の用事も無くクインが現れた事を思いだすと、ステープルは小さくため息をついた。

「私もさつき見たわ、彼何か言ってた？」

「町の外に魚を運びに行くとか言っていましたけど」

ステープルは心の中でクインを笑った。どうやらクインは本当に

魚を運ばなければならなくなってしまったようだった。

二人と別れた後、ステープルは自分の指先を見た。その先からは何も伸びていない。

糸の神が授けた人と人を繋ぐ糸、それを当人同士その目に見えるようにする事ができる仲介者だったが、仲介者自身は何故か儀式を行っても自分の糸を見る事ができなかった。

「やっぱり何も見えないわ」

そもそもヤーンの子孫と言われる仲介者には糸そのものが存在しないのかもしれない。それとも糸はやはり存在して見えないだけで、クインの言っている事は本当なのかも知れない。でもステープルにはそう思う確信もなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9738c/>

---

糸紡ぎの仲介者

2010年10月8日13時10分発行